

追悼、愛国、右へ倣へといふごとくトリコロールの顔が増えゆく
松本実穂

パリ在住の作者ならではの「パリ同時多発テロ事件」の波紋に取材した一連。ドキュメンタリー性よりも批評を前面に出して特色を出している。

事件の波紋が、一方的、画一的なことへの危惧が主題。下句の切れ味、よく。

教職と短歌にかけし一生の最後の歌を幾度も読む

田中拓也

今は亡き故今泉さんの遺稿をまとめて読んだ折の作
のような。元「心の花」編集委員だった今泉さんは、長く高校の教員をつとめておられた。卓球部の部長等、クラブ活動の指導も熱心しておられた。

今泉さんと同じく、教員であり短歌に賭けている作者の思い深さが読める。ただ、結句が類型におさまってしまったようで、その点がやや残念。

葉の色に同化せし虫の大小を朝光に見るキヤベツの

畑
赤木芳枝

キヤベツの葉に緑色の虫がいるのか、透明、半透明の虫がいるのだろう。低い角度で照らす朝の太陽光だからこそ、見えると思うのだと思う。観察の歌、発見の歌として楽しい一首にしあがっている。一言注文をつけさせてもらうと、「虫の大小を」が表現として大ざっぱなのが気になる。

池の面に鳥が木の実を落としてたり波紋が徐々に広がり
梶尾利徳

短歌の現在

No.419 今月の14首を読む

佐佐木幸綱

第三句「……落したり」と第五句「……広がりけり」がゆったりと対応するかたちになっているところがポイント。何度か読みかえてみると、リズムの心地よさを味わうことができる。自然の営みの細部にそそがれる視線。

君のことをこれから僕らは瑛那ちゃんと呼ぶよ何度
も呼ぶよ何度も
木村俊介

初めての子供が誕生して、その子の名前を決めたときの記念の一首である。具体的な固有名詞を入れたところが、記念の作として大切なところ。

生まれた折だけではなく、幼少時には、名前入り短歌をつくっておいてやるといい。私は、意識的に息子の名前入りの短歌を何首かつくっている。ただ、自分の子供を「君」と呼ぶのは、今では使い古されたレトリックで、古風な感じがしてしまう。

怒るとは体内の水濁ること川上にまだ雨降りやまず
細溝洋子

まだしばらくの間は、濁った水が上流からやってくるらしい。コントロールできない自分の感情をうたう歌は、古典以来多くの名作を生んできた。そして、まだまだ大切な題材であるようだ。

思い込み曖昧なるわが日々において辞書は引いた？
と住さんの声
堀越貴乃

昨年十月に他界された住正代さん哀悼の作。現在の自分自身の日常とかさねて追悼することで、追悼の思いのリアルさをつたえている。作者は、かつて、しばらくの